

接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化 に関する計画論的研究

中江, 亮太

<https://doi.org/10.15017/1654988>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	中江 亮太		
論 文 名	接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化に関する計画論的研究		
論文調査委員	主 査	九州大学	教授 包清 博之
	副 査	九州大学	教授 田上 健一
	副 査	九州大学	准教授 朝廣 和夫

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

近年、海辺空間には、国土の魅力形成につなげる保全・活用を図るための計画が求められている。しかし、広域に連続する海辺空間の景観資源の計画に関わる計画制度をみると、平成 21 年に策定された広域地方計画（国土形成計画）は独自の事業が設定されておらず、海辺景観の保全や活用を検討する場合、港湾法や自然公園法など、個別の制度における事業を活用する必要があるなど、多くの課題がみられる。

本論文の内容はこのような課題を背景とした計画論的研究であり、広域地方計画における地方ブロックと、特に海辺と特徴付ける自然公園区域および港湾に着目し、各々の計画範囲における海辺への接近性、海辺景観の構成要素の潜在量の把握、海辺景観の顕在化の計画条件を明らかにすることを目的としている。具体的には、広域地方計画区域（広域スケール）として九州圏、自然公園区域（地域スケール）として玄海国定公園、港湾計画範囲（地区スケール）として博多港の 3 つのスケールごとの条件を捉えることを前提に、①広域地方計画区域において、海辺景観に資する基礎的な空間構成を把握し、顕在化の条件を明らかにすること、②国内の詩歌作品から自然物・人工物に関する印象深い海辺景観要素を継時的に明らかにすること、③自然公園における海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすること、④港湾における海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を明らかにすること、⑤広域地方計画区域における自然公園と港湾の潜在量把握と顕在化のための計画条件を明らかにし、スケール別の計画論的意義を探求することといった 5 つ研究課題が設定され、次の 7 つの章で構成されている。

第 1 章「研究の背景及び目的」では、既往の文献や研究論文の検討を通じて、海辺に関わる国土施策、海辺の開発、松の植林などに関する歴史的変遷を把握するとともに、景観の考え方を把握・整理し、広域スケールから個別具体の計画範囲まで段階的に海辺景観資源の潜在量を把握し、接近性からみた海辺景観の顕在化の計画条件を探求するための 5 つの研究課題が設定されている。

第 2 章「研究概要」では、スケール別の調査対象地と研究方法の設定として、具体的には、広域地方計画区域（広域スケール）、自然公園区域（地域スケール）及び港湾計画範囲（地区スケール）の 3 つのスケール毎に、流域（集水域）に基づく海辺の調査単位の設定や、道路長、滞留用地面積から海辺への接近性を設定する方法、詩歌作品に基づく海辺の景観要素の抽出方法を設定した。また広域スケールに基づく中心市から海辺までの時間距離に関する分析方法の設定が説明されている。

第 3 章「広域地方計画区域からみた海辺景観に資する基礎的空間構成の把握・類型化」では、研究課題①に対応するため、九州森林管理局管内図や環境省自然環境保全基礎調査などの資料について GIS を用いて分析し、河川流域の単位に従って、広域地方計画区域の「九州圏」を対象に、陸側

100m 範囲内の道路率からみた現状の海辺の接近性や、海辺の地理的特徴についてクラスター分析による「浜辺型」や「人工型」などの海辺の類型化の把握を通じて、広域スケールにおいて、接近性からみた海辺景観に資する基礎的な空間構成要素を潜在量の把握と顕在化に関する計画条件を明らかにしている。

第4章「詩歌作品からみた海辺の景観要素の抽出」では、研究課題②に対応するため、万葉集の時代から20世紀までの国内の代表的な11詩歌作品から、自然の海辺と港の印象深い海辺景観要素を抽出すると共に、我が国の海辺の歴史的出来事に沿って継時的に把握・整理することで、印象深い海辺の景観要素の存在特性を明らかにしている。

第5章「自然公園における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件」では、研究課題③に対応するため、自然公園区域となる「玄海国定公園」を対象に、海辺の道路長率が設定され、海辺への接近性から自然公園の保全・活用の可能性が示されている。また、4章で得られた自然の海辺景観要素に対応する資源を、国土地理院地形図を用いて抽出・整理し、自然公園（地域スケール）での接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を定量的に明らかにしている。

第6章「港湾における接近性からみた海辺景観資源の顕在化の計画条件」では、研究課題④に対応するため、都市計画区域における「博多港」を対象に、集水域を単位として交流厚生用地、緑地、旅客施設用地などの不特定多数の人が滞留可能な用地の面積率から港への接近性が評価されている。また、第4章で得られた港の海辺景観要素に対応する資源を、港湾計画図を基に抽出・整理することで、港（地区スケール）において、接近性からみた海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件を定量的に明らかにしている。

第7章「海辺景観資源の潜在量把握と顕在化の計画条件と計画論的意義」では、研究課題⑤に対応するため、広域スケールで、中心市・高次都市から海辺までの時間距離を把握し、時間的接近性から海辺景観の活用の可能性を把握すると共に、自然公園及び港の存在率から海辺景観資源の潜在量を把握することで、接近性からみた海辺景観の顕在化のための計画条件を示すと共に、本研究の手順の計画論的意義を示し、今後の展開のための検討課題に言及している。

以上から、調査委員全員が博士（工学）の学位に値すると認めた。